

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年目)

## 1. 研究課題

家族と愛の研究

Family and Love Studies

## 2. 研究代表者氏名

富山 一郎

TOMIYAMA, Ichiro

## 3. 研究期間

2022年4月-2025年3月(2年目)

## 4. 研究目的

コロナ禍での外出自粛により、夫婦間・親子間の不和・虐待や、一人親家庭の経済的困窮があらためて浮き彫りになったように、今日、「一对の親が子どもを献身的に養育する家庭」すなわち「核家族」を標準として行われる政策や事業は、多くの齟齬や歪みを生じさせている。女性の社会進出や、人々の性的指向の多様化、さらには人工的生殖の増加に伴い、家族の「形」は著しい変化を被りつつあるにもかかわらず、我が国の政策や立法が想定する家族の「イメージ」のほうは、「異性どうしの両親と子ども」という旧来のスタンダードに固執しつづけているのである。家族の実情とイメージのあいだのこうしたギャップは、たとえば夫婦別姓の法制化や、民法の嫡出推定規定の緩和をめぐる議論を停滞させ、ひいては、少子化や非婚化といった社会問題の遠因ともなっている。

本研究班は、「家族」をとりまく法的、制度的、歴史的、社会文化的、医学的、思想的文脈を横断しつつ、また、他の国々や文化の実情に照らした比較研究を忘れることなく、このギャップを埋めるための新たな超域的パラダイムの確立を目指す。その際、本研究班では、その特色となりうるひとつの問題系をアプローチの導線に据える。「愛」(夫婦愛、家族愛、親子愛——とりわけ子の親にたいする愛)の問題系である。愛を媒介としてセクシュアリティと生殖および次世代育成を一体化させる「核家族」=「愛の共同体」という価値観は、それを生み出し、それによって支えられることを望んだ西欧近代の社会構造や生産様式の変貌とともに、その実質的な役割を終えたようにみえる。にもかかわらず、それは夫婦別姓反対派の唱える「家族の絆」のような道徳的価値に姿を変えて、今日も生き存えている。その原動力は何であり、いかなる言説装置がそれを支えているのだろうか。これらの問題の解明は、件のギャップの解消を妨げる知的制止を解くことに資するものと思われる。

Conflicts among family members, spousal and child abuse, poverty among single-parent

households: these are all familiar family problems, but have been aggravated by the Covid-19 pandemic. Yet, we have not freed ourselves from the ideal of nuclear family, a group consisted of a heterosexual couple and their children, being united by a sense of intimacy and love. It is clear this ideal no longer reflect real family life, where more people are in non-heterosexual relationships, more women participate in labor force and more children are born with assisted reproductive technology. Family laws and policies in Japan, however, are based on a model of nuclear-family consisted of a working father, a housewife mother and their biological children, and therefore disseminate the ideal image and encourage the practice of nuclear-family, making it hard for married couples to have separate family names and civil codes regarding the legal status of a child born after divorce to be revised.

We aim at constructing new models for family that can accommodate diverse practice of family life across the globe, by bringing together legal, institutional, historical, socio-cultural, medical, philosophical insights and conducting comparative studies of family life in different cultures. What makes our project unique among the previous studies of family is our focus on “love”—love in a couple, love in the family, love between parents and children, and love of children for their parents. Perhaps, the vital role of nuclear-family, organized around its ability to integrate sexuality, reproduction and nurturing of next generations under the banner of “love,” has come to an end. Nevertheless, it survives as a moral value in the name of “family bonds.” It is, therefore, an urgent task to make visible driving forces behind and discursive operations through which the idea of nuclear-family continues to survive.

## 5. 本年度の研究実施状況

2年目である2023年度には、9回の例会を開催し、初年度に引き続きメンバー相互の対話を深め、本研究で共有される多様な関心について、ブレイン・ストーミングと共通認識の構築を繰り返した。例会にて取り上げられたテーマは、メディア・イベントとしての出産と「優生家族体制」批判、家族の「症状」を引き受ける（ことを余儀なくされる）子どもの病理の研究、詩人ゲーテ（の戯曲作品）における家族愛の分析、健康の社会的決定要因の比較研究における家族ファクターの位置、ケア・ペナルティを科された「母」の観点からみるケアと愛の境界など、多岐に渡る。例会のひとつ（11月）は国際シンポジウムを兼ね、国内外から招聘した作家・研究者とともに、中国と日本の児童文学における家族像を比較検討した。また、4月には班員有志で水戸芸術館「ケアリング／マザーフード：「母」から「他者」のケアを考える現代美術」展を観覧し、本研究テーマのアクチュアリティを体感した。

## 6. 本年度の研究実施内容

2023-05-20 メディアイベントとしての出産——『極私的エロス・恋歌 1974』と優生家族体制 発表者 木下千花 大学院人間・環境学研究科

- 2023-06-17 アンドレ・ブルトン『ナジャ』改訂版(1963)における「ドキュメント」の問題 発表者 藤野志織
- 2023-07-15 島尾マヤへの家族臨床的接近 発表者 花田里欧子 東京女子大学
- 2023-09-16 The life and after life of leftists in the fifties 発表者 陳光興 外国人客員研究員
- 2023-10-21 ゲーテにおける愛と家族——妹コルネーリアへの愛 発表者 熊谷哲哉 近畿大学
- 2023-11-25 中国と日本の児童文学における家族像 私の目のなかの家族、愛、そして児童文学におけるそれらの運用について 発表者 秦文君 中国作家協会児童委員会副主任 日本児童文学と小学校国語教科書——「家族」の描かれ方をてがかりに 発表者 成實朋子 大阪教育大学 (秦文君氏講演、成實朋子氏講演へのコメント) コメンテーター 唐亜明 《小活字》社(北京)編集長
- 2023-12-09 Comparative Research on Social Determinants of Health: Findings from the United States, Current Project Status in Japan, and Relevance to Family and Love Studies 発表者 DISTEFANO, Anthony カリフォルニア州立大学/外国人客員研究員
- 2024-01-20 家族と“愛”: パートナー関係、親子関係、そして、パートナー関係と親子関係 発表者 神原文子 元神戸学院大学
- 2024-02-17 「母」になると「わたし」を失う——ケアと愛と自己の境界 発表者 直野章子

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

- 2023-11-25 国際シンポジウム「中国と日本の児童文学における家族像」

## 8. 研究班員

### 所内

立木康介、直野章子、酒井朋子、藤野志織、藤原辰史

### 学内

木下千花(大学院人間・環境学研究科)、丸山里美(大学院文学研究科)

### 学外

富山一郎(同志社大学グローバルスタディーズ研究科)、沈恬恬(東京大学大学院法学研究科)、中井亜佐子(一橋大学大学院言語社会研究科)、楡井誠(東京大学大学院経済学研究科)、新藤麻里(東京大学社会科学研究所)、小門穂(大阪大学大学院文学研究科)、内田利広(龍谷大学文学部)、小川公代(上智大学外国語学部)、熊谷哲哉(近畿大学経営学部)、鈴木洋仁(神戸学院大学)、長瀬正子(佛教大学社会福祉学部)、花田里欧子(東京女子大学現代教養学部)、日高由貴(大阪城南女子短期大学総合保育学科)、菅野優香(同志社大学グローバルスタディーズ研究科)、DISTEFANO, Anthony(カリフォルニア州立大学フラトン校)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
			(内女性)	(内女性)	(内女性)	(内女性)		(内女性)	(内女性)	(内女性)	(内女性)
人文研所属 (内女性)	1 (3)	6 (0)	0 (1)	1 (0)	0 (0)	0 (15)	30 (0)	0 (7)	7 (0)	0 (0)	0 (0)
京大内 (人文研を除く) (内女性)	2 (2)	2 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (7)	7 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
国立大学 (内女性)	5 (7)	8 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (15)	27 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
公立大学 (内女性)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
私立大学 (内女性)	7 (5)	9 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (15)	38 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
大学共同利用機関法人 (内女性)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
民間機関 (内女性)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
外国機関 (内女性)	1 (0)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (0)	3 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
その他 ※ (内女性)	1 (1)	2 (1)	2 (1)	0 (1)	0 (0)	0 (0)	2 (1)	2 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計	17 (18)	28 (18)	3 (1)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	107 (53)	5 (1)	7 (7)	0 (0)	0 (0)

※「その他」の区分受入がある場合  
 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員  
 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要  
 児童文学作家

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	2		1	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	25		5	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名	掲載 論文数	掲載 年月	論文名	発表者名
1	P. Bruno et al., En finir avec la psychanalyse ?, èrès	1	R5.6	Division du sujet : Foucault/Lacan	Kosuke TSUIKI
2	ウェンディ・マツムラ『生きた労働への闘い』（増渕あさ子・古波藏契・森亜紀子訳）法政大学出版局	1	R5.7	翻訳によせて——本書の四つの切断について（ウェンディ・マツムラ『生きた労働への闘い』の解説）	富山一郎
3	希土、48号（希土同人社）	1	R5.8	演劇で病を治すことは可能か——ゲーテの『リラ』について	熊谷哲哉
4	映像学、110号	1	R5.8	作家主義と女性映画	木下千花
5	François VIALLA, Pascal VIELFAURE et Lucile LAMBERT-GARREL (dir.) Naître ou ne pas naître de l'Antiquité au XXIe siècle, LEH édition	1	2023.9	La protection juridique et sociale du fœtus au Japon	Haluna KAWASHIMA, Minori KOKADO
6	生命倫理、通巻34号	1	R5.9	提供卵子による生殖補助医療の経験における迷いと悩み——Webアンケート調査結果より——	洪賢秀・小門穂・柘植あづみ
7	岡崎宏樹・山本努編著『現代社会の探求理論と実践』（学文社）	1	R5.10	皇室とメディア 宮内庁のインターネットにおける発信の効果検証	鈴木洋仁
8	ユリイカ、2023年10月号	1	R5.10	坐産介添人——妊娠映画作家・中島貞夫	木下千花

9	松田毅・藤木篤・新川拓哉編著『応用哲学』（昭和堂）	1	R5.11	生殖技術とルール——当事者をどう守るか	小門穂
10	奥村隆編著『戦後日本の社会意識論』（有斐閣）	1	R5.12	加藤秀俊 中韓文化論の全域化	鈴木洋仁
11	河野真理江『メロドラマの想像力』（青土社）	1	R5.12	解説	木下千花
12	Research Institute of Economy, Trade and Industry, February 2024	1	2024.2	Empirical Estimation of the Propagation of Investment Spikes over the Production Network	Makoto Nirei
13	Research Institute of Economy, Trade and Industry, February 2024	1	2024.2	Economic Growth through Basic Research by Firms: A Science Linkage Approach	Makoto Nirei, <u>Koki Oikawa</u> , and <u>Masahiro Oroku</u>
14	税務弘報	1	R6.2	税制と所得分配	楡井誠
15	IMES Discussion Paper, Series 2024-E-1, Bank of Japan	1	2024.3	Digitalization, Entrepreneurship, and Wealth Inequality	<u>Ichiro Muto</u> , <u>Fumitaka Nakamura</u> , and Makoto Nirei
16	RIETI Discussion Paper Series 24-E-038, Research Institute of Economy, Trade and Industry, March 2024	1	2024.3	Propagation of Export Shocks: The Great Recession in Japan	<u>Toshihiko Mukoyama</u> , <u>Kanato Nakakuni</u> , and Makoto Nirei
17	Journal of Political Economy, March 2024（電子版）	1	2024.3	Repricing Avalanches	Makoto Nirei and <u>José A. Scheinkman</u>
18	大阪城南女子短期大学研究紀要、第58巻	1	R6.3	「模擬保育」に関する一考察——演劇教育の観点による保育実践力、及びコミュ	日高由貴・ <u>樋口幸</u> ・ <u>多田鈴子</u> ・ <u>生田暢彦</u>

				ニケーション力の育成の試みとして	
19	法律時報、1201号	1	R6.3	生殖補助医療により生まれる子どもの権利	小門穂
20	ギョーム・ルセ／フィリップ・ペドロ／磯部哲／河嶋春菜（編）『公衆衛生と人権』（向学社）	1	R6.3	日本における妊娠—周産期ケアと女性の経験への影響	小門穂
21	『書斎の窓』（有斐閣）	1	R6.3	「放蕩息子、帰る」	楡井誠
22	東京女子大学心理臨床センター紀要	1	R6.3	島尾マヤへの家族臨床的接近(5)—Identified Patientの概念整理とその検証に向けて	花田里欧子
23	ZINBUN, 54	1	R6.3	Through a Glass Darkly: Recollecting, Representing, and Interpreting the Past	<u>Janice Haaken</u>
24	ZINBUN, 54	1	R6.3	Emerging “Stories”: Surrounding Sexual Abuse Lawsuits	Ryoko Hanada
25	ZINBUN, 54	1	R6.3	Dual Edge of Fantasy in Traumatic Recollection	Akiko Naono
26	『現代社会研究』第10号	1	R6.3	アイドルの社会学にむけて：文化社会学とメディア論のあいだ	鈴木洋仁
27	NIRA オピニオンペーパー No.76、NIRA 総合研究開発機構	1	R6.3	人口減少下の日本経済と財政の長期展望——2060年の家計の姿を描く	楡井誠・宇南山卓・ <u>片桐満</u> ・ <u>小枝淳子</u>

本年度発表された高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された論文

	雑誌名	インパクトファクター (数値)	掲載論文数	掲載年月	論文名	発表者名
1	Journal of Political Economy	10.4	1	2024. 3	Repricing Avalanches	Makoto Nirei and José A. Scheinkman

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

	研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名	国際共著
1	ゴシックと身体 想像力と解放の英文学	小川公代	R5. 8	松柏社	
2	Naître ou ne pas naître de l'Antiquité au XXIe siècle	François VIALLA, Pascal VIELFAURE et Lucile LAMBERT-GARREL (dir.), Minori KOKADO et al. (auteurs)	2023. 9	LEH édition	○
3	現代社会の探求 理論と実践	岡崎宏樹・山本努編著、鈴木洋仁他著	R5. 10	学文社	
4	露出せよ、と現代文明は言う 電子版	立木康介	R5. 11	河出書房新社	
5	マクロ経済動学—景気循環の起源の解明	楡井誠	R5. 11	有斐閣	
6	戦後日本の社会意識論	奥村隆編著、鈴木洋仁他著	R5. 12	有斐閣	
7	世界文学をケアで読み解く	小川公代	R6. 3	朝日新聞出版	

12. 博士学位を取得した学生の数

なし

13. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし



#### 14. 次年度の研究実施計画

最終年度となる 2024 年度には 11 回の例会がプログラムされており、その内の少なくとも 1 回は公開セミナーとして催すことを考えている。客員教授を班長とする本共同研究には、3 年の研究期間を延長させる余地がないため、成果のまとめ方や公表手段について、2024 年度の早い段階で決定する。これまで研究班内で語られ、論じられてきた諸テーマの拡散を、いくつかの中核的問いの周りに整理し、各メンバーの研究のあいだに有機的かつ動的な連関が生じるよう配慮するとともに、目下の政治的・法制度的問題にじかにリンクするテーマについては、それにたいするアクチュアルな視点を盛り込めるようにしたい。また、これまでの二年度と同様に、各例会の記録は本研究班ホームページ上で公開、共有する。

#### 15. 研究成果公表計画および今後の展開等

2024 年度には、全 11 回プログラムされている例会の内、少なくともひとつを公開セミナーとして催したい。その後は、各研究班の最終年度もしくはその翌年度に人文研アカデミーの企画を催すという所の方針に従い、2025 年度にこの枠での公開シンポジウムを開催するとともに、同年度末までに本研究班の最終報告書をまとめる予定である。